

登壇者プロフィール

佐藤元状（さとう・もとのり）

慶應義塾大学法学部教授。英文学、映画研究。著書に『プリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学—イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』（ミネルヴァ、2012）、『グレアム・グリーン—ある映画の人生』（慶應義塾大学出版会、2018）。

波戸岡景太（はとおか・けいた）

明治大学理工学部教授。アメリカ文学研究。トマス・ピンチオンからライトノベルにいたる、日米の現代小説の諸相を研究対象とする。主著に『ピンチオンの動物園』（水声社、2011）、『映画原作派のためのアダプテーション入門』（彩流社、2017）。

高美智（こう・みか）

法政大学社会学部准教授。映画研究。著書に *Japanese Cinema and Otherness* (Routledge, 2010)、共著に『交錯する多文化社会』（ナカニシヤ出版、2016）、論文に“Neo-documentarism in Funeral Parade of Roses” (*Screen*, 2011) など。

大野裕之（おおの・ひろゆき）

劇作家・脚本家・映画プロデューサー・演出家。日本チャップリン協会会長。『チャップリンとヒトラー—メディアとイメージの世界大戦』（岩波書店、2015）（第37回サントリー学芸賞）。映画『太秦ライムライト』（2014）でカナダ・ファンタジア国際映画祭最優秀作品賞他。

中垣恒太郎（なかがき・こうたろう）

専修大学文学部教授。アメリカ文学・比較メディア文化研究。著書に『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』（音羽書房鶴見書店、2012）、共編著に『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂、2015）。大衆文化の想像力を系譜学として捉え、メディアの特質と時代思潮を探ることに関心を寄せている。

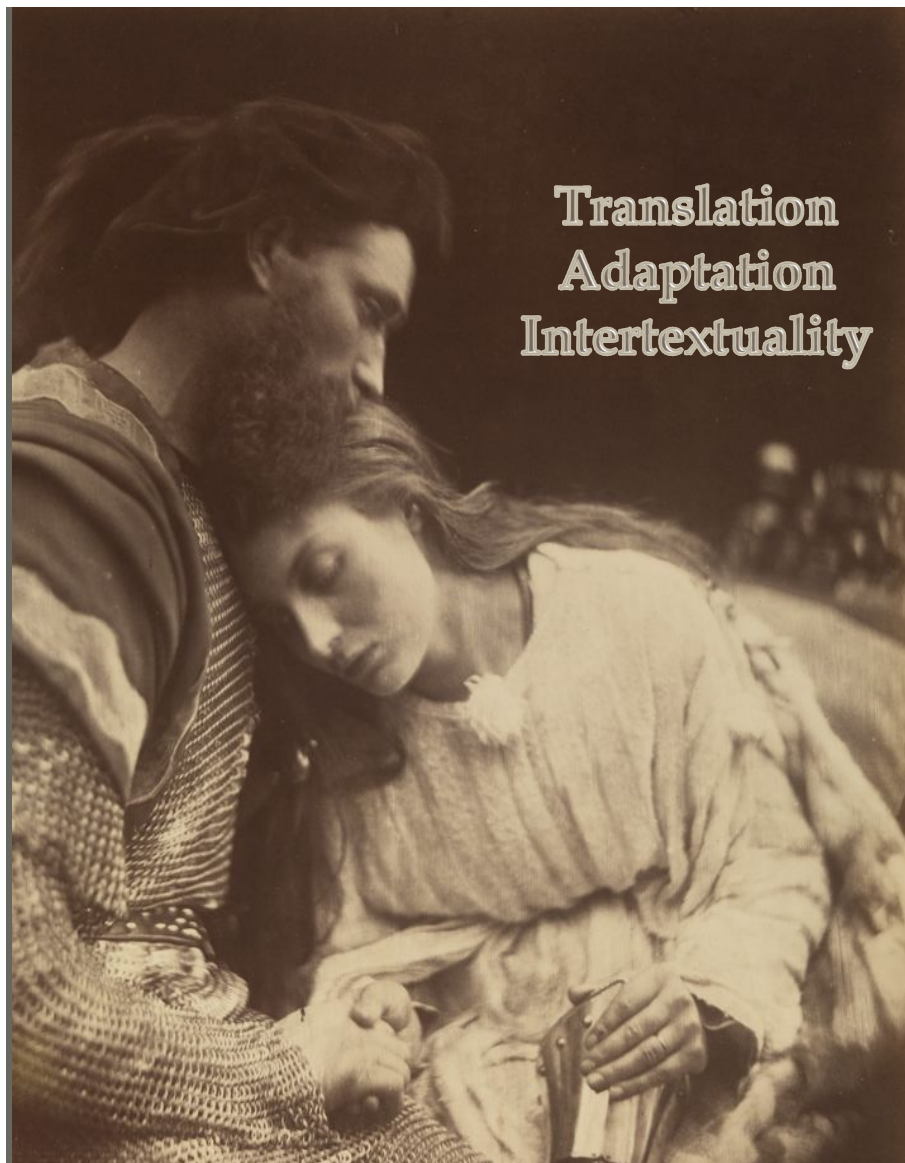
須川亜紀子（すがわ・あきこ）

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授。文化研究、オーディエンス研究。アニメにおける少女表象や2.5次元文化。著書に『少女と魔法—ガールヒーローはいかに受容されたのか』（NTT出版、2013。2014年日本アニメーション学会賞受賞）、共編著に『アニメ研究入門〈応用編〉』（現代書館、2018）、共著に *Shojo Across Media* (Springer, 2019)、*Women's Manga in Asia and Beyond* (Palgrave, 2019) など。2.5次元文化に関しては、『ユリイカ』特集「2.5次元」（2015年4月）、『美術手帖』特集「2.5次元文化—キャラクターのいる場所」（2016年7月）、『装苑』特集「衣装のアイデンティティ」（2017年9月）への論考など。青弓社ウェブ連載「2.5次元文化論」は書籍化予定。

宮本裕子（みやもと・ゆうこ）

明治学院大学言語文化研究所研究員。専門は映画理論、アメリカの初期アニメーション。博士論文『フライシャー兄弟の映像的志向：アニメーションのオルタナティブな可能性を探る』（2018）、「フライシャー兄弟のロトスコープに関する試論：抑圧される黒人身体」（『アニメーション研究』、2017）。

Translation Adaptation Intertextuality



日時:2019年3月21日(木)
会場:明治学院大学白金校舎
本館1308教室

プログラム

11:00-12:30 ワークショップ

宮本裕子「何がアダプテーションではないのか

——今敏のアニメーションから考えるアダプテーション研究の方法論」
(ディスカッサント 貞廣真紀 JA日下 本多まりえ)

「アダプテーション研究」の方法論は多様である。まず、筒井康隆の小説を今敏が翻案したアニメーション映画『パブリカ』を主たるテキストとし、アダプテーション理論における具体的な方法論の範例を確認する。ポストモダニスト的とも言われる今敏のアニメーションは、アダプテーションという行為への自覚を見せている点で格好の例となる。他方、あらゆるテキストを歴史化し、パリンプセストとして見るアダプテーション理論の前で、アダプテーションではないテキストがありえるのかという点についても議論を加えたい。

休憩（昼食は各自でご準備ください。学内の生協、食堂は休業日です）

13:30-15:30 シンポジウム（1）

佐藤元状「アプロプリエーション・アートとしての現代小説

——村上春樹『アフターダーク』を読む」

現代文学には、視覚芸術、とりわけ映画へのオマージュとなる作品が多く見られる。カズオ・イシグロの初期作品の日本映画へのオマージュ、アリ・スミスのパゾリーニへのオマージュ、村上春樹のフランス映画へのオマージュなど。だが、本発表ではこれを単にオマージュとして捉えるのではなく、別の理論的、芸術史的視点、つまりアプロプリエーションの視点を提示することによって、現代文学と視覚芸術のクロスオーバーの意義について考察していく。

波戸岡景太「ノベライゼーションは映画を超えるか」

原作小説を超えたと評価される映画化作品（アダプテーション）は数多く存在するが、原作映画を超えたとされる小説化作品（ノベライゼーション）は希少である。本発表では、日米の実験的なノベライゼーションの成果を紹介、分析することで、文学史的にも映画史的にも見過ごされがちなこの特異なジャンルの可能性を探ってみよう。

高美智「文体と「影」の映像化：市川準の『トニー滝谷』」

アンドレ・バザンは、文芸映画の中には、文学作品に固有の表現や言語的特質の「等価物」を映像であらわそうとするものもあると論じた。本発表では、そうした試みの一例として、市川準が映画化した『トニー滝谷』を取り上げ、原作（村上春樹）の文体がどのように映画に取り込まれているかを考察する。特に、比喩表現の映像化に注目し、比喩によって示される「影」が映画テキストの中心にいかにか召喚されているかを論じたい。

15:45-17:45 シンポジウム（2）

大野裕之「チャップリンとアダプテーション」

チャップリンの『ライムライト』（1952）の世界初の舞台化である『音楽劇 ライムライト』（東宝製作・石丸幹二主演）の脚本家・権利処理担当の立場から、また『大秦ライムライト』（2014）や川端康成原案の新作映画『葬式の名人』（2019 秋公開）を製作した経験から、アダプテーションの実践の現場を報告する。さらに、チャップリンを、ルーツである19世紀イギリス演劇から20世紀アメリカ映画へとアダプテーションした存在として捉え、彼の未完の遺作『フリーク』にも触れながら、創作とアダプテーションの関係を大きな視野で考えてみたい。

<『音楽劇ライムライト』> <https://www.tohostage.com/limelight>

中垣恒太郎「この世界を“animate”する試み

——トランスメディア・ナラティヴとしてのアニメ文化の現在」

高畑勲演出による『赤毛のアン』（「世界名作劇場」1979）、絵画アニメーション（ペイント・オン・グラス）の手法による翻案作品『老人と海』（アレクサンドル・ペトロフ監督、1999）、表現手法の伝統を継承しながら3DCGを融合させ話題となった『宝石の国』（京極尚彦監督、2017）など、小説やマンガをアニメ（ーション）化として翻案する際の表現技法の変遷と多様性を概観し、特に『この世界の片隅に』における、こうの史代によるマンガ版と片渕素直によるアニメ映画版とを比較考察する。二次創作、SNSを含むオーディエンスの関与にも目を向ける。ディズニー・アニメーション・スタジオ制作による『ベイマックス』（2014）におけるアメリカン・コミックス原作『ビッグ・ヒーロー・シックス』（1998）の翻案に関しても（余裕があれば）比較参照する。

須川亜紀子「2.5次元文化における虚構的身体とファンの関与

——ハイブリッドリアリティ下のトランスナラティヴ」

「2.5次元文化」とは、現代ポピュラー文化（アニメ、マンガ、ゲーム）の虚構世界を現実世界に再現し、虚構と現実の曖昧な境界を享受する文化実践のことである。ステイクホルダー側と消費者（ファン）側の相互作用によって産み出されるこの文化実践の例として、2.5次元舞台、コスプレ、キャラ/声優コンサート、コンテンツツーリズム、応援上映、Vチューバーなどがあげられる。これらの現象に共通する「虚構的身体」とファンの深い関与について、アニメ/マンガ/ゲームのコンテンツの翻案である2.5次元舞台（ミュージカル『テニスの王子様』、ミュージカル&舞台『刀剣乱舞』他）などの事例から考察する。